

創作童話 『森と子どものひみつ作戦』



特定非営利活動法人 センスオブアース・市民による自然共生パンゲア

address : 〒174-0063 東京都板橋区前野町4-8-6

tel & fax : 03-3960-6052 e-mail : info@npo-soe.jp

この紙芝居は、板橋区の「ボランティア・NPO 活動公募事業補助金」を活用して作成しています。



①

ぼくは雄平。3年生になったばかり。
いつも、森の道公園で遊ぶ。
この公園の木はおしゃべりする。
ただし、子どもたちとだけ。
大人は絶対信じてくれないけれど、本当なんだ。

ある日、僕が公園にかけこむと、

入り口にずしんと立っているクスノキのワイルドが

「よう、雄平君、元気かい？」

今日、学校は楽しかったかい？」

って、ぼくに声をかけるんだ。

だから僕はワイルドの幹を

タンタンとたたきながら、こつこつのを。

「いつものと同じ。学校はふつう。」

一番楽しいのは帰りの会。やっと終わるから。

さあ、遊ぶぞ？」

「ハハハハハハ、今が一番楽しいってわけか。

うんと遊んで行けよ。」

ワイルドは楽しそうにゆっゆっゆっ

体をゆさぶって、ぼくを元気づけてくれる。



②

すると、後ろから2年生のヒロキがやってきたんだ。
ワールドの隣に立つ、コナラのモテモテ君が
「モテモテだった？ ヒロキ君。」
「そんなわけないだろ。」
どうせ、おれは小さくて、
足もおそいからもてないよーだ。
でも、今日、先生から
絵がうまいってほめられたんだ。」
と、うれしそうに言つと、
「やっぱり、ヒロキ君はいいところあるねえ。
しょうらい、ピカソみたいになるかもね。」
とモテモテ君と一緒に喜んで言ったので、
ヒロキはモテモテにさわりながら
周りをクルクル回っていたよ。



3

そこに遅れて、1年生のサキちゃんもやってきた。
かつらの木のウツトリおばさんが、
「サキちゃん、どうしたの。泣きぐそかいて。」
「だってね、宿題をいっぱいしたのに、
もっと、練習よってママがやらせるから、
友だちと約束しているから、やらないって言ったら、
ママがダメーっておこったの。」
そういってぐやしそうちに
ウツトリおばさんの木に頭を押し付けたよ。
すると、ウツトリおばさんは
「サキちゃんは、いつもちゃんと宿題やって
忘れていったことないし、
がんばってる子だなと
ママも本当は、思っていますよ。」
さあ、もう、泣かないでいっぱい遊びなさい。」
といいながら、
ウツトリする匂いのはっぱを
たくさんサキちゃんの上に落としました。
「はーい」
とサキちゃんは元気に答えたよ。



4

ぼくらはあとから来た友達を入れて、
キロリのオニごっこを始めた。

普通とちよっと違うのは、
木の妖精が逃げる人を守ってくれるんだ。
オニはどんどん増えるふやしオニなんだけど、
木にタッチしている間は、
木のバリヤに守られて、つかまることがない。
でも、ある呪文をオニが唱えると、バリヤが消える。
その呪文が聞こえ出したら、
だれでも逃げ出して、一足飛びにかつとぶ。
その呪文とは「キロリ・キロリ・キロリ」なんだ。

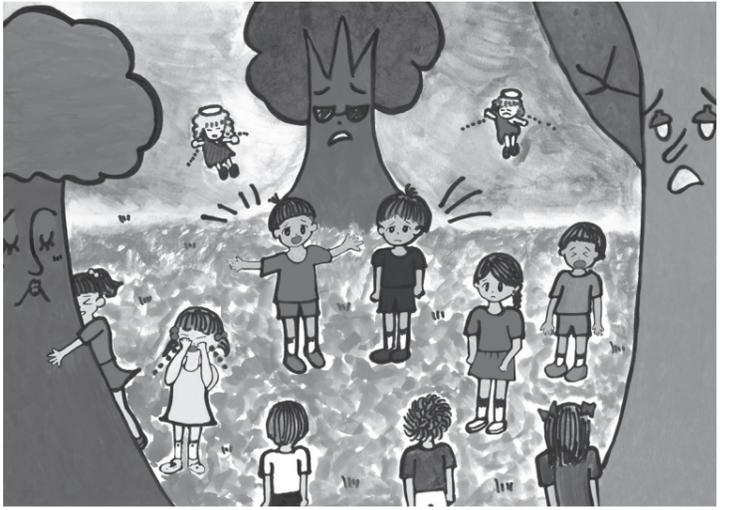
おにごっこをした後は読まなくても可

みんな、ワイルドたちに
助けてもらいながら、逃げ回る。
「タツキく〜ん、キロリのキが聞こえたら、
走り出すんだよ。」
「早く、魔王の陰に隠れて。」
公園には、子どもたちと応援する木の声が、
ワ〜ンワ〜ンとにぎやかにこだましている。



5

ある日のこと、
ぼくが公園にいくと、ワイルドが黙っている。
「どうしたの、ワイルド。何かあったの。」
ワイルドは、つらそうに
やっとの思いでこういったんだ。
「この公園の木が切られて、
大きな建物が建つんだって。
街の人がおれの前で立ち話していた。
それも、間もなく。」
「そんな話聞いていないよ。ひどすぎる。」
ぼくがほかの木を見回すと、
どの木も黙ってしょんぼり下を向いていたんだ。
そこにやってきたタツキが
その話を聞いてなきだした。



6

ぼくはタツキに、いった。

「みんなに知らせよう。行こう。」

タツキは顔のなみだを手でぐしゃっとなでると、

ぼくに必死でついてきた。

ぼくとタツキの話を聞いた子どもたちが

公園にやってきた。

ワイルドや魔王、ウットリおばさん、

モテモテたちの真ん中に

30人余りの子どもたちが、集まった。

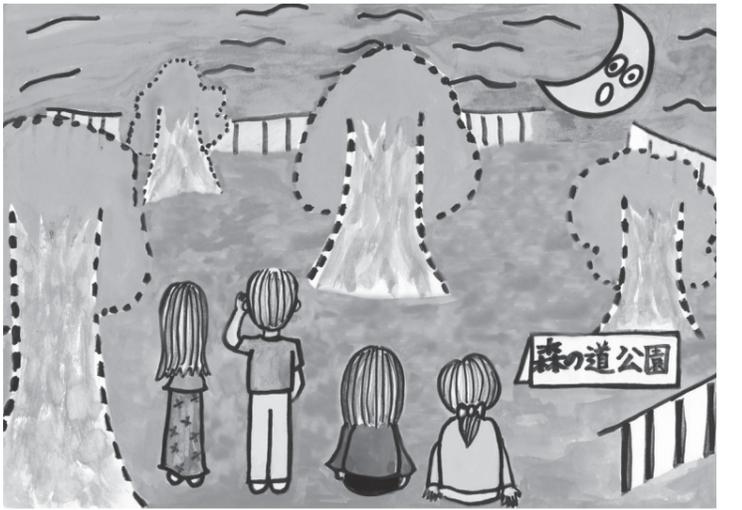
木を切って建物が建つ計画は、

大勢の大人からも聞いて確かだと分かった。

そして、長いことそこで、

ぼくたちと木たちで、話し合ったんだ。

木の妖精たちもね。



⑦

その日の夜、ふしぎなことが起きた。

子どもたちが一斉にいなくなったのだ。

よく朝、町中、大さわぎ。

「うちの子が帰ってこない。」

「うちの子も帰ってこない。」

「どこにいったの?」

子どもの親たちはみんな、森の道公園に集まった。

その時、大人たちの目に入った光景に、

みんな立っていられないほど驚き、

しゃがみこんだ。

だって、公園の木が一本もなくなっていたから。

ただの何もない広場だけ残されていたから。



8

そのうち正気に返った大人がさげんだ。

「木はどこに行ったんだ!」

「子どもたちはどこにいるの?」

「こんな不思議なことは見たことがない。」

「子どもたちく、かえってきてく。」

大人たちが、口々に叫んでいくと、

町長さんがやってきた。

「みなさん、こんなふしぎなことがあるのでしょうか。」

木を切る前になくなってしまおうとは。」

「それに子どもまで消えてしまおうなんて。」

子どもたちの親は、

我慢できないという勢いで、町長さんに言ったんだ。

「この公園に建物を建てるなんて言ったから、

こんなことが起きたんです。」

「ここは子どもたちが大好きな公園なんです。」



9

その時、ふしぎなことが起きた。

どこからか、声が聞こえる。

「まちの人たち、森の道公園の木を切って、

建物を建てるのをやめてくださーい。

やめるまでは、

私たちと木たちはもどりませーん。」

サキちゃんの声が

街の人たちのところへ届いたんだ。

高い空で妖精たちがサキちゃんを囲んでいる。



10

とうとう、町長さんは言った。

「わかりました。」

子どもたちを返してください。

もう、ここには、建物を建てませんから。」

遠い空から、

ワーという歓声が聞こえたかと思うと、

ぐんぐん降りてきたかたまりがある。

木たちの枝に腰かけたぼくたちだ。

喜びの声を上げながら、

公園に戻ってきたんだよ。

もちろん、家族に会いにね。

そして、木たちも、ぼくらといっしょに

みんな大きな声を上げて、歌ったんだ。

♪ 僕らはみんな生きている。

生きているから楽しいんだ。

ぼくらはみんな生きている。

生きているから、なかよしだ。



11

街の人たちは初めて木の顔を見て、

木の声を聴いたんだ。

木の心がわかったからね。

「木に顔があるなんて、知らなかったよ。

木に命があるなんて。」

「木と子どもたちがなかよしだったなんて。」

街の人と、ぼくたち、子どもたち、

町長さんも手をつないで、

みんなで木の周りをスキップしてまわったよ。

木をまもったお祝いにね。

木たちはそれはそれはいいお顔して、

ヒューー、ザワザワ 笑っていたよ。

森の道公園はそれからずっと、

子どもと木の兄弟公園なんだ。

《めでたしめでたし》